

# 心と言葉のグローバル英語文法 入門 要約

## 〈はじめに〉

### 【要約】

- 学校英文法を詳しく理解することが英語の文法を学ぶことだと一般的には考えられている。その考え方は英語ライティングという観点からみればまったく正しくない。学校英文法を理解したからといってそれがそのまま英語ライティングの上達につながるわけではない。
- 英語を書くうえで文法学習は必要ないのかといえばそんなことはない。英語ノンネイティブが英語できちんとした文章を書こうとすれば英語の思考方法と表現方法を理論のうえからも理解しておかなければならない。
- 合理的かつ効率的に英語ライティングをマスターしようとするならば最初から正しい理論のもとで正しいトレーニングをしたほうがよい。その「正しい理論による合理的なトレーニング」の基礎が英語ライティング「文法」である。

## 【Part 1】

### 英語センテンスの構造

#### 【要約】

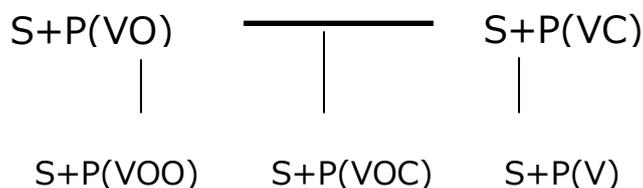
- 英語を理解して表現するために必要なセンテンスの構成要素は Subject（主部/主語）、Predicate（述部/述語）、Modifier（モディファイアー）、Connector（連結語句）の4つであり、それ以外にはない。
- 英文で何かを表現をするということは、この4つの構成要素をつくりだして、規則やパターンにあわせて順番に並べていくことにほかならない。
- 過去形、受動態、関係代名詞節の用法などといった文法項目は、すべて枝葉の知識にすぎない。
- ところが Subject、Predicate、Modifier、Connector が英語学習における根幹的要素であるという事実を知っている日本人英語学習者の数が驚くほどに少ない。これが日本の英語教育の最大の欠点のひとつである。
- Subject（主部/主語）は英語センテンスの王様であり、Subject がセンテンスのすべてを支配する。ゆえに英語のセンテンスをつくる際に第一に考えるべきことは Subject を何にするかである。
- Subject は主「語」（word）でなく主「部」（part）であるから、語だけでなく、さまざまなかたちをとる。
- Predicate（述部/述語）は Subject とペアを組むメインパートナーであり、Subject と Predicate が揃ってはじめて英語のセンテンスが成り立つ。
- Modifier(修飾部/修飾語)は「補足情報」を示すものである。
- Connector（接続部）は、ふたつの「思考のまとまりのあいだの関係性」を示すものである。

## センテンスパターン（文型）

### 【要約】

- 学校文法の「基本 5 文型」という考え方は、イギリスの Charles Onions という英語学者が考案したものが、日本の英語教育に持ち込まれたものである。それ以外にも、さまざまな文型論がある。
- 本論では成瀬が考案した「基本 2 文型プラス派生 3 文型」をベースに論を進める。英語における「心の働き」を理解して運用するためには「基本 2 文型プラス派生 3 文型」が最良だと考える。
- Predicate の最も一般的な「心の働き」は、Subject と別のもの（Object）との「関係性」を示すことである。この関係性をあらわす文型が「Subject（主部）+ Predicate Verb（述部動詞）+ Object（目的部）」、つまり S+P(VO) である。
- S+P(VC) は、S というひとつの存在の「属性」（Attribute）を示すものである。S+P(VO) のように、ふたつの存在のあいだの関係性を示すものではない。
- 対象となる存在が Subject か（これが S+P(VC)）、それとも Subject とは別の何らかの存在との二項対立のかたちをとるか（これが S+P(VO)）——この違いこそが S+P(VC) と S+P(VO) との本質的な違いである。
- S+P(VOO) は、S+P(VO) の二項対立の認識から派生した構文のひとつである。S+P(VOO) では Subject と Object というふたつの実体のほかに、もうひとつの実体（通常は人間）が登場する。
- S+P(V) は、Predicate（Verb のみ）が Subject の属性を表す。すなわち S+P(VC) と S+P(V) の「心の働き」は同じものである。
- S+P(VOC) は、S+P(VO) と S+P(VC) との複合形であり、Predicate のなかにもうひとつの二項関係が埋め込まれている。

### 英語の基本文型（基本 2 文型 + 派生 3 文型）



## 「言葉のかたち」としての Words（語）、Phrase（句）、Clause（節）

### 【要約】

- 「心の働き（機能）」の概念である Subject、Predicate、Modifier は、実際に表現される場合には、Words（語）、Phrase（句）、Clause（節）という「言葉のかたち（形態）」で表現される。

- Words（語）とは語または語のグループのことである。Words は Subject、Predicate、Modifier のどこにでも用いられる。
- Phrase（句）は Clause（節）の「簡易版」である。Clause は Subject と Predicate の両方が揃っている「思考の単位（まとまり）」だが、Phrase は Subject や be 動詞については省略してしまう。Phrase も Subject、Predicate、Modifier のどこにでも用いられる。
- Clause（節）は、Subject（主部）と Predicate（述部）の両方が揃っている「思考の単位（まとまり）」のかたちである。Clause（節）も Subject、Predicate、Modifier のどこにでも用いられる。
- Words、Phrase、Clause のいずれのかたちを使っても、同じ内容の認識・思考を表現することができる。
- Words、Phrase、Clause のいずれで表現するのかは、述べたい内容の違いで決まるのではなく、文体をどのようにするのかで決まる。
- 述べたい内容は同じでも「言葉のかたち」としてはさまざまに表現できるという事実は、英語に限らず、あらゆる言語での文章づくりでの最大のポイントのひとつである。

## 【Part 2】

### センテンスをつくる（1）S+P(VO)

#### 【要約】

- 英文を書く際には、日本語の認識・思考との対比をおこなわなければならない。私たち日本人は、つねに日本語をつづじて世界を捉えて、ものごとを考えているからである。
- S+P(VO)認識とは Subject と Object というふたつの存在（もの・こと）をまず設定し、そのあいだに Predicative Verb という関係性を構築することである。
- 日本語文の多くが「○○は～である。」のかたちであることから、日本人は「である」を be 動詞に読み替えて英文を S+P(VC)のかたちにするのが非常に多い。S+P(VC)の多い英語は日本人英語の最大の特徴のひとつとなっている。グローバル英語の書き手としては S+P(VC)とともに S+P(VO)の表現もつねに使えるようになることが大切である。
- 日本人はまた「～がある、～がいる」を there is/are …に読み替えてしまう傾向が非常に強い。ここでも S+P(VO)の表現を適切に使えるようになることが大切である。
- have を使った S+P(VO)は「～が痛い、冷たい、長い」といった日本語の形容詞文にもうまく対応する。
- S+P(VO)の Predicative Verb に have 以外の動詞を使うことによって「～がある」という日本語を英語で簡潔に表現できる。
- S+P(VO)の Subject は日本語の「～れば／たら、なら（ば）」にもうまく対応する。
- S+P(VO)の Subject は日本語の「～で」のかたちにも対応する。
- Subject にあたる日本語は、「～は、が」だけでなく「～れば、～たら、～ならば、～で」など、さまざまなかたちが対応する。「～は、が」イコール主語という考え方は捨てなければならない。

## センテンスをつくる (2) S+P(VC)

### 【要約】

- S+P(VC)は、ある存在 (もの・こと) とその属性 (性質・状態・特性など) を表現する際に用いられる構文である。
- S+P(VC)では、Subject (主部) で何かの存在 (もの・こと) を表現し、Complement (補足部) でその属性を表現する。Predicative Verb (述語動詞) には、be 動詞またはそれに代わる動詞を使う。
- すべての存在がさまざまな属性を持っている。
- 日本人が英語を書くときに問題となるのが S+P(VC)構文の使いすぎである。S+P(VO)で書いたほうがよいときでも、日本人は S+P(VC)のかたちのほうを使ってしまうことが非常に多い。それは日本語が、英語のような「主語・述語」型の言語でなく、「主題・解説」型の言語であるからである。
- 日本語のトピックマーカの「～は」が果たしている機能は、人間の主観部分に踏み込んでおり、英語の Subject が果たしている機能よりも、はるかに幅広い。そのため、日本語の「主題・解説」構造を英語の「主語・述語」構造をそのまま一対一対応させることはできない。

## センテンスをつくる (3) S+P(V)、S+P(VOO)、S+P(VOC)、There is

### 【要約】

- S+P(VC)と S+P(V)は「言葉としてのかたち」は違っているが、ひとつの存在とその属性を表明するという「心の働き」の点では同じものである。
- S+P(VO) to/for M と S+P(VOO)は、「言葉としてのかたち」は違っているが、複数の存在間の関係性を表明するという意味では S+P(VO)と S+P(VOO)とでは「心の働き」は同じものである。
- S+P(VOC)は S+P(VO)と S+P(VC)の合体形である。すなわち、S+P(VO)の Object の部分に別の S+P(VC)が埋め込まれたものである。
- There is 構文は、実体 (もの・こと) が存在していることを新情報として提示するための表現形式である。

## センテンスをつくる (4) Modifier

### 【要約】

- よい英語センテンスを書くには、幹にあたるセンテンスパターンを学んだだけでは十分ではなく、「枝葉」の部分、すなわち Modifier (モディファイアー) についても学んでいかなければならない。
- Modifier を使わないで Subject-Predicate のシンプルなセンテンスを連ねるだけでも「心の働き」は「言葉のかたち」として表現できる。それなのに、なぜわざわざ Modifier を使ってセンテンスを複雑なものにするかには、無駄を省く、思考をまとめる、高級で知的にみせる、という 3 つの理由がある。
- Modifier を使ってセンテンスに補足説明情報を付加していくには、名詞要素に対して Modifier を使って情報を付加する方法と、動詞要素/センテンス全体に対して Modifier を使って情報要素を

付加していく方法の 2 つがある。

- Adjective Modifier (形容詞的モディファイアー) の役割は、名詞要素に対して補足説明情報を付け加えることにある。
- Adverbial Modifier (副詞的モディファイアー) の役割は、動詞要素またはセンテンス全体に対して補足情報を付加することにある。
- Adverbial Modifier (副詞的モディファイアー) は置かれるべき定位置が決まっていない。センテンス内のどこに置かれてもよい。この位置の自由さは、英語の表現を豊かなものにすると同時に、大きな混乱を引き起こす元凶となっている。

### センテンスをつくる (5) 名詞認識

【要約】

- 日本語での名詞認識は単層構造である。日本語人はすべての「もの」(名詞)を単層的に認識している。これは日本語人にとって当たり前だが、世界的にみると多数派とはいえない。
- 英語での名詞認識は「特定/不特定、可算/不可算、単数/複数」の三層構造である。英語では、この三層構造を通すことなく書き手/話し手が名詞を表現することはできない。読み手/聞き手が英語を理解する際にも必ずこの三層認識を認識しながら理解をしている。
- 英語の名詞における第一の認識は、「特定/不特定」という区分である。言葉の送り手(話し手/書き手)からみて、その名詞を特定できるものとして認識しているか、あるいは特定できないものとして認識しているか、という区分である。特定できると認識した場合には、the を使って表現する。
- 英語の名詞における第二の認識は、「可算/不可算」という区分である。つまり、数えられるか、数えられないか、である。
- 書き手がその名詞を「可算」と認識している場合には、第三の認識判断として「単数・複数」の区別をする。
- 特殊な例としては「純粹不可算名詞」「純粹可算名詞」と呼ばれるものがある。
- 英語を使う際に大切なことは、英語における名詞認識の本質とはどのようなものなのか、それが日本語における名詞認識とどのように具体的に違うのかをまずしっかりと理解し、そのうえで使い手としての認識にあわせて、英語の名詞をそれぞれに的確に表現することである。
- 英語の名詞認識には、オプションな認識条件として、数量の認識がある。名詞中心の世界観を持つ英語では、動詞中心の世界観を持つ日本語に比べると数量についてはるかに厳密な区別を行う。日本人が英語で何かを表現する際には、そうした英語の厳密な数量認識も適切に表現しなければならない。

### センテンスをつくる (6) 動詞認識

【要約】

- 英語動詞は、以下のような 6 層認識、5 層表現を有している。
  1. モダリティ (Modality)

2. 完了/非完了 (Perfective)
  3. 進行/非進行 (Progressive)
  4. 受動/非受動 (Voice)
  5. 時制 (過去・非過去)、法 (叙実・叙想) (Tense, Mood)
- 人間の心の動きは「理知」と「情意」に大別できる。「モダリティ」とは、そのうちの情意の部分、つまり話し手の判断や感じ方を表す言語表現のことである。
  - 「モダリティ」は、「対事的モダリティ」と「対人的モダリティ」のふたつのタイプに分類できる。「対事的モダリティ」とは、話している/書いている内容に対して話し手/書き手がどのような心的態度（判断や感じ方）をとっているかを示す概念である。「対人的モダリティ」とは、話している/書いている内容を話し手/書き手が聞き手/読み手に対してどのような心的態度で伝えようと思っているかを示す文法概念である。
  - 英語の完了形（「have + 過去分詞」形）の認識イメージは、話し手/書き手が起こった「コト（事態）」を心のなかに「持っている」というものである。
  - 英語の進行形の認知的イメージは、話し手/書き手がある状況にある（S が C である）という SVC 的な感覚である。
  - 受動態は、1)トピックを変えたい、2)行為者がわからない、3)行為者を隠したい、4)文体として客観的にみせたい、5)文体として知的にみせたい、という 5 つの理由から用いられる。このうちの 1)と 2)が受動態の本来の機能であり、3)から 5)の理由での受動態の利用はできるだけ避けたほうがよい。
  - 「時制」とは、必ずしも「時間の流れ」そのものを表現するものではない。たとえば、現在時制は時間的な「いま」を表現するのが本務ではなく、「現実存在する」という意味の「実在」を表すことが本務である。
  - 「法」(Mood) は西欧的な文法概念であり日本人にはまったくなじみのないものである。西欧では「コト」を表現する際に、そのコトが客観的事実であるとの認識のもとに表現することを Indicative Mood (直説法、叙実法) といい、そのコトが主観的なものつまり「非事実」であるとしての認識のもとに表現することを Subjunctive Mood (仮定法、接続法、叙想法) という。
  - 英語では「時制ずらしの叙想化」という現象が起こっている。

## センテンスをつくる (7) 否定認識

### 【要約】

- 日本語の否定認識と英語の否定認識のあいだには本質的な違いがふたつある。1)否定対象の位置、2)名詞の否定の有無である。
- 日本語の否定辞の「～ない」は文末に置かれて、その前方に表された事象（コト）を否定する。英語の否定辞である not はその前方に表された事象ではなく、その後方に表された事象を否定する。
- 日本語には名詞を否定する否定辞は存在しない。そのため、この名詞の否定という認識を心の奥

底まで浸透させることは日本人にとって非常に難しい。

## センテンスをつくる (8) 名詞転換・名詞化

### 【要約】

- 「名詞転換・名詞化」(Nominalization) とは、「動詞中心」に表現されているものを敢えて「名詞中心」の表現に変えてしまうことをいう。
- 英語は思考のまとまりを「名詞中心」に表現しようとする傾向が非常に強い言語であり、日本語は思考のまとまりを「動詞中心」に表現しようとする傾向が非常に強い言語である。そのため、日本語であれば動詞を中心に表現されるところの思考のまとまりを英語で表現する場合には名詞化のもとに表現されるケースが非常に数多くある。
- 公的な文章などでは思考の基本単位を名詞化によってセンテンスのなかに埋め込む技法が頻繁に用いられている。その一方で実際の英語の文章ではこの「名詞化」を使いすぎているという弊害が非常に目立つ。

### 【Part 3】

## 英語パラグラフの構造

### 【要約】

- 英語のパラグラフ (Paragraph) は、「思考の集合体 (まとまり) 」としてのセンテンスを基本単位として、さらに大きな「思考の集合体 (まとまり) 」をつくるものである。
- この文章構造は現代西洋音楽の構造と同じである (英語では作文も作曲のどちらも Composition)。現代西欧音楽も現代西欧文章も「分析・統合」という西欧近代的思考の産物ですから、同じ構造をしているのは当然である。
- 英語パラグラフの思考のフロー (流れ) は英語センテンスの思考フローの拡張バージョンである。英語センテンスの思考フローでは、まず Subject-Predicate というメインコメントがあり、それに Modifier というサブコメントが付け加えられる。パラグラフ思考でも、まずメインピックとメインコメントを提示して、それにサブコメントを補足されていく。
- 実際のパラグラフには、「トピックセンテンス + サポートセンテンス」の「型」ではないものも数多くある。だが英語パラグラフの基本は、やはり「トピックセンテンス + サポートセンテンス」という「型」である。この「基本の型」をベースとしてさまざまなかたちが展開される。
- 日本語の文章を「トピックセンテンス + サポートセンテンス」という英語パラグラフの基本形のもとに分析するによって、世界中の誰にもわかりやすいグローバル英語をつくりだすことが可能になる。